

第2回研究実践奨励賞

立教大学 コミュニティ福祉学会 第2回「研究実践奨励賞」選考報告

研究実践奨励賞選考委員会

2016年6月25日に開催された研究実践奨励賞選考委員会にて、第2回研究実践奨励賞作品を、林和秀著「認知症グループホーム（認知症対応型共同生活介護）とは何か～歴史の変遷からみる『かたち』への一考察」、岩田真由美著「その人らしい生き方と逝き様に寄り添って」とすることを決定した。

以下、同賞設立の経緯、選考体制および選考過程、受賞作品の講評を報告する。

1. 学会「研究実践奨励賞」設立の経緯

詳細については、『まなびあい』誌（第8号 p.245）において空閑先生（前事務局長）が「研究実践奨励賞選考委員会」を代表して述べられているので、繰り返さないが、基本的な位置づけとして、コミュニティ福祉学会は、学部¹の在學生、大学院生、卒業生、大学院修了生、教員間の交流の促進と「まなびあい」の場としての活性化を目指すものである、2014年11月9日の第7回年次大会総会にて「研究実践奨励賞」の創設とその要綱、細則が承認された。

2. 第2回「研究実践奨励賞」の選考体制及び選考過程

2016年5月21日（土）（新座キャンパス）及び6月25日（土）（池袋キャンパス）で開催された「選考委員会」において、選考対象となる該当作品（第8号掲載の12作品（詳細は略す））について受賞作品について真摯な検討がなされた。

以下に、今回の受賞作品の選考過程を報告し、今後の課題を述べておきたい。

- ・**選考基準**：今回の研究論文に関しては、その水準としての完成度や論旨（目的・方法・考察・結論）の明確化だけに囚われるのではなく、多少粗削りな作品であったとしても、学会員（在學生、卒業生、修了生）による研究実践の潜在的な発展可能性（ポテンシャルな力）を感じさせるものであること。

実践記録（現場からの報告）については、現場で、悪戦苦闘する日々の中から「コミュニティ福祉のマインド（生命の尊厳・基本的人権意識に基づく生活権保障・健康福祉の眼差し）」を実践していることについて支持や共感ができるものであることを選考基準とした。

- ・**選考体制**：作品選考の公平性を担保するために、選考委員会には運営委員メンバー以外の外部選考委員として今回は、坂無 淳先生（コミュニティ政策学科）にご依頼し選考過程に参加して頂く体制で臨んだ。
- ・**選考対象作品と結果**：規定により選考の対象となった作品は『まなびあい』第8号掲

載の中の12作品(=会員が執筆した論文・研究ノート・実践記録・実践報告・現場からの声・活動報告・リレーメッセージ)であった。予め教員達を通して、在学生等に依頼し提出された推薦書(101)の集計結果(12の評価項目&コメント等)も参考にしながら、白熱した議論が展開された。

第1回受賞作は、「学会員に元気を与えてくれるような作品」を対象としたが、今回(第2回受賞作)は、対象作品の「研究論文としての完成度も重要だが、本学会としての基準としての『まなびあい』では研究の潜在的な発展可能性を感じさせるもの、さらに、現場の日々の実践からの学び・気づきが表現されているもの」という基準に焦点化しながらそれぞれの対象作品について議論を重ね検討を進めた。

その結果、■研究ノートとして掲載された林和秀著「認知症グループホーム(認知症対応型共同生活介護)とは何か～歴史の変遷からみる『かたち』への一考察～」と■現場からの声として掲載の岩田真由美著「その人らしい生き方と逝き様に寄り添って」の2作品が受賞作品として選考された。同日、その後、実施された運営委員会に選考結果を提案し、了承された。

3. 受賞作品の講評(まとめ)

- 1) 林和秀著「認知症グループホーム(認知症対応型共同生活介護)とは何か～歴史の変遷からみる『かたち』への一考察～」については、選考委員から、「震災支援の高齢者施設でも同様な問題があり、高齢者施設で働く卒業生達には参考になる。実践から問題提起、歴史のまとめも読み応えがある。しかし、具体的な方策についての言及が乏しいのだが、今後の研究の発展・可能性に期待が持てる」という点で選考委員の見解が一致し受賞が決まった。
- 2) 岩田真由美著「その人らしい生き方と逝き様に寄り添って」については、福祉の実践現場(=岩田氏は、「地域包括支援センター」での勤務)で日々関わる人たちの「暮らしの中での生と死」の問題に対する「暖かい眼差しと鋭い問題意識」、そして、「コミュニティで働く支援者のアイデンティティ」について自問自答し迷いながらも自分の信念を貫こうとする姿勢が、「現場からの声」として在学生達から「テーマ設定と表現力」と「現場での実践に感動・共感する」という評価項目への支持も高く、選考委員でも同様な見解に至り受賞が決まった。

4. 今後の課題(概要)

コミュニティ福祉学会の「研究実践奨励賞」が今回で第2回ということもあり、「選考評価基準」が未だに定まっていない状態である。つまり、「選考基準は、毎回違っても良いのか」という意見が選考委員から問題提起された。この点は、拙速に「固定的な基準」を決めるよりも歴史を重ねながら『まなびあい』らしい基準が定まってくるのではないだろうかという意見もあり、今後の課題とされた。尚、「研究実践奨励賞」という表現よりも「まなびあい賞」と呼ぶことが相応しいのではないかという意見もあったが、それは通称名とする扱いの方が良いのではないかという意見が大勢を占めた。